

会 議 録

会 議 名	第1回 第2次小金井市芸術文化振興計画策定委員会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課		
開 催 日 時	令和元年12月4日(水) 午後6時30分 - 午後8時30分		
開 催 場 所	前原暫定集会施設 A会議室		
出 席 委 員	大澤寅雄 委員長 伊藤裕夫 副委員長 小林勉 委員 水津由紀 委員 長澤麻紀 委員 野澤佐知子 委員 福沢政雄 委員 山村仁志 委員 桑谷哲男 委員 小林真理 委員 戸舘正史 委員 西村德行 委員		
欠 席 委 員	な し		
事 務 局 員	1 事務局運営補助 特定非営利活動法人S Tスポット横浜 小川智紀、田中真実、荒田詩乃 2 小金井市 コミュニティ文化課長 鈴木遵矢 コミュニティ文化課専任主査 吉川まほろ コミュニティ文化課主任 津端友佳理 コミュニティ文化課主事 小野智広 3 事業実施者 特定非営利活動法人アートフル・アクション 宮下美穂		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由	可	傍聴者数	1人
会 議 次 第	(1) 依頼状の交付 (2) 委員自己紹介 (3) 事務局紹介 (4) 正副委員長互選 (5) 小金井市芸術文化振興計画・アートフルアクションの概要について(小金井市芸術文化振興条例及び小金井市芸術文化振興計画の策定のプロセスの確認も含む) (6) 小金井市芸術文化振興計画評価・検討有識者会議の評価・検討結果について (7) 策定委員会において今後検討すべき課題の整理		

	(8) その他 今後の進め方について 意見交換等 次回以降の日程について
会 議 結 果	別紙のとおり
会 議 要 旨	別紙のとおり
提 出 資 料	第2次小金井市芸術文化振興計画策定委員会概要 小金井市芸術文化振興計画 小金井市芸術文化振興計画評価・検討有識者会議報告書 小金井アートフル・アクション！（小金井市芸術文化振興計画推進事業）2009～2017 活動記録 やってみる、たちどまる、そしてまたはじめる

## (開会)

【コミュニティ文化課】みなさま、こんばんは。本日はご多忙の中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。ただいまより、第1回 第2次小金井市芸術文化振興計画策定委員会を開会いたします。この策定委員会は、今回が初回となりますことから、委員長が選任されるまでの間、甚だ恐縮ではございますが、本会議を所管しておりますコミュニティ文化課の私吉川の方で、進行させていただきますので、よろしくお願いいたします。

### (1) 依頼状の交付

【コミュニティ文化課】次に依頼状についてですが、みなさまのお手元に配布させていただいておりますので、ご確認をお願いいたします。本来であれば、市長がまいりまして依頼状を交付するところですが、本日は他の公務のため、机上に依頼状を配布しているところです。ご了承ください。

### (2) 委員自己紹介

【コミュニティ文化課】次に、委員自己紹介に移ります。お手数ですが、席の順に、一言ずつ、ご挨拶をお願いします。

【西村委員】東京学芸大学の西村と申します。学生がいつもご迷惑をおかけしています。私もお迷惑をおかけしないようにと思っています。美術教育が専門です。

【戸舘委員】こんばんは。愛媛県松山市愛媛大学に所属しています、戸舘正史と申します。

【小林真理委員】東京大学の小林と申します。文化政策・文化行政を研究しています。小金井市交流センターの運営委員長もやっています。それから芸術文化振興条例、芸術文化振興計画の策定において事務局を担っておりました。

【大澤委員】ニッセイ基礎研究所の大澤と申します。文化政策やアートマネジメントの調査研究をしています。昨年度小金井市文化芸術振興基本計画の評価検討有識者会議に参加させていただきました。

【伊藤委員】伊藤裕夫と申します。今は肩書きは無く、文化政策の研究者をやっています。昨年度の有識者会議に関わっています。

【桑谷委員】小金井市民交流センターで運営協議会の委員をしていますが、その運営協議会の推薦で委員を仰せつかりました、桑谷でございます。座・高円寺という杉並

区が作った劇場で館長をしておりました。現在は相談役をしております。ヒップ・バードと言う個人事務所を主宰し、公立劇場や舞台芸術関係の仕事をしておりますが、今回のような芸術文化振興計画の領域の広いジャンルで、どこまで皆さんと意見交換が出来るか心配ですが、楽しみながらやっていきたいと思っております

【山村委員】小金井市はけの森美術館運営協議会の委員の推薦で来ました、山村と申します。東京都美術館学芸課長をやっております。その前は府中市美術館で 23 年間開設準備室を含めて勤めておりました。小金井は大変親しみを持っています。

【福沢委員】福沢と申します。よろしくお願ひします。NPO法人小金井文化協会の会員でもあります。メンバーのご経験や経歴を見ると荷が重いのかなと思うのですが、市民の目線でやっていきたいと思ひます。

【野澤委員】野澤です。委員をやるのははじめてなので、どう参加すればいいかまだわからないですけど、みなさまと一緒にやっていけたらいいと思ひます。

【長澤委員】長澤麻紀と申します。小学3年生のこと3才の娘がいます。アートを専門にしていたわけではなく、市民の意見として参考にしていただければと思ひます。

【小林勉委員】小林勉と申します。普段は声楽家として活動しています。宮地楽器ホールで年に6、7回公演しています。川崎市でもオペラの活動をしています。普段ホールを使っている側として参加したいと思ひています。

### (3) 事務局紹介

【事務局・吉川】: 本会議の事務局を担当させていただきます、小金井市のコミュニティ文化課のコミュニティ文化課長の鈴木、主任の津端、主事の小野、専任主査の吉川でございます。文化政策の専門的見地から事務局の運営補助をしていただく、特定非営利活動法人STスポット横浜の小川さん、田中さん、荒田さんです。平成 21 年より芸術文化振興計画の運営を委託しております、特定非営利活動法人アートフル・アクションの宮下さんにもオブザーバーとして参加していただきます。

### (4) 正副会長互選

小林真理委員の推薦と委員会の承認により大澤委員を委員長に、戸館委員の推薦と委員会の承認により伊藤委員を副委員長に決定した。

【大澤委員長】ありがとうございます。他にやりたい方がいらっしやらなければ私がやらせていただきます。評価検討有識者会議でも委員長をさせていただいたんですけど、去年と違い市民のみなさんと考える場ですので、ぜひ市民のみなさまからのご発

言を聞かせていただきたいと思います。

【伊藤副委員長】副委員長に指名されました伊藤です。昨年度も副委員長をつとめさせていただきました。昨年度の議論をふまえて、今度は市民のみなさまと考えていきたいと思っています。

【大澤委員長】改めてこの第2次小金井市芸術部文化振興計画策定委員会運営要綱第9条の規定に基づいて、オブザーバーとして宮下さんに毎回参加をお願いしたいと思います。併せてご承知ください。

## (5) 小金井市芸術文化振興計画・アートフルアクションの概要について

【大澤委員長】それでは、議題の5「小金井市芸術文化振興計画・アートフルアクションの概要について（小金井市芸術文化振興条例及び小金井市芸術文化振興計画の策定のプロセスの確認も含む）」について、全体の経緯をコミュニティ文化課から、実際の事業内容についてをアートフル・アクションの宮下さんから、それぞれ説明をお願いします。

【事務局・吉川】小金井市芸術文化振興計画の策定のプロセスも含めた概要について、ご説明します。本計画の背景には、平成4（1992）年の小金井市文化のまちづくり市民会議での「文化のかおるうつくしいまち小金井をめざして」という提言があります。その後、平成18（2006）年4月に財団法人中村研一記念美術館が市に寄贈され、小金井市立はげの森美術館として新たな一步を踏み出しました。また平成13年（2001年）には、国で文化芸術振興基本法が制定され、地方公共団体の文化政策に対する責務が示されたことなどから、平成19（2007）年に小金井市芸術文化振興条例を制定し、条例に基づき芸術文化振興計画を策定いたしました。策定に関しては、市民の意見を反映することを主軸として、学識経験者、障害者、高齢者、青少年、文化の団体推薦、市民公募にて、小金井市芸術文化振興計画策定委員会を設置しました。特徴的なことは、今回の委員の小林真理先生を中心とした東京大学大学院人文社会系研究科と共同研究の協定を結び、市民の声を反映して策定しました。学術的な裏付けがあり、画期的な方法で話題性もありました。計画を策定し、800名を対象とした市民アンケートのほかに、ワークショップや中間報告会、公開ミーティングなど画期的な作り方で策定しました。多くの市民が関わり、策定委員会の議論は、市民主体の芸術文化の振興をめざし、ワークショップや市民講座など具体的な事業につながっていきました。計画は期間を3つに分けています。現在は3期の10年間も終わり、市の総合計画が令和3年にできますので、それに合わせて2年間延伸して12年間の計画になっています。第1期は、委員会のメンバーや小林先生の研究室の学生で実行委員会を作り、共同研究として事業の実施を担い、実験的なことをしていました。3年が終わり、特定非営利活動法人アートフル・アクションが立ち上がり、市の委託事業として事業を続けています。実行委員会として実験的なことをやったのですが、小金井市としては内容が斬新すぎて、外側（市外）からの評価は高かったのですが、肝心の市民の中

では事業の内容が理解できないというドーナツ化現象がおきてしまいました。そこで、平成24年に現在のNPOに事業を委託した際に今後の事業内容の進め方を話し合い、地味だけど長い目で見てこの地域の芸術文化の意識の底上げをはかる、次世代育成や、土地にあった活動をしていこうという方針にして、この10年間やってきました。具体的な内容について、アートフル・アクションの宮下さんからお話しされるといいかなと思います。

【事業実施者・宮下】NPO法人アートフル・アクションの宮下と申します。条例委員会と美術館寄贈の議論をする場に参加して、その後計画の策定、実施に携わらせていただいている、15年ほど経っています。10年間、保育園、小学校に行き、残念ながら、中学校や高校には行けなかったのですが、東京学芸大学のみなさん、近隣の大学、たくさんの市民の方と出会い活動してきました。どのような考えで事業をしてきたのかを2,3のプロジェクトを引いて説明します。計画の目標はざっくり、「芸術文化の力でひととまちを豊かに」とうたっていると思います。計画書に「市民主体の」とありますが、条例の段階から役割がうたわれていまして、行政は市民の自発的な活動を支える環境整備、市民は自らが芸術文化の担い手であることを自覚し芸術文化の振興につとめる、団体は、事業を推進するとともに活動の支援につとめる、とうたわれています。

去年の評価検討有識者会議の冊子に、委託金一覧表があります。この事業の大きな特徴、課題になると思うところは、市の事業委託のお金のほかに、東京都歴史文化財団からの共催金、小金井市を通じて獲得した文化庁、地域創造の助成金をいただいて、事業を複合的に展開してきた点だと思っています。

10年間どんなことを考えてやってきたかという、「まちはみんなのミュージアム」ということをうたっていました。これは大きな特徴で、市民が主体となったNPOが行政から委託を受け市民の方に向け事業を実施しているのです。トップダウンで何かをするのではなく関係はフラットであったり、隣近所的であったりということのなかで活動しました。なので、公共的な施設だけじゃなく、屋外、軒先とかおうち借りたり、それをもってしてミュージアムであるといいたいと思い活動してきました。

もうひとつは小学校や保育園と連携することが多く、その中でこの事業がどうあるべきかと考え、ひとつの仮説として、「学校がミュージアムだったら学びはどう変わるのか」、という問題意識から活動してきました。よくあるように、アーティストを招いてアーティストの思うように活動し去っていくやり方ではなく、アーティストとともに市民の人たちが事業運営に関わり、サポートしたりアイデアを出して下さって、大きな役割を果たして下さって来ました。その市民の方たちがスピノフして、自分でオープンハウスでギャラリーを作ったり、ライブを企画したり、私たちの活動に関わったからだけではないですが、ひとつの契機としていろんな方が関わり、いろんなことが展開しています。

どんな風に市民の人が関わってくれたのかという例です。これは「植物になった白線」

というプロジェクトで、最初の3年間のアーティスト招聘事業で関わってくれた浅井裕介さんを招きやりました。事務局も市民で2、3人しかいない状況で、市内全域に道や学校に絵を焼き付けるということで、かなり大掛かりなプロジェクトになったときに、事務局の足りないところを参加した市民の方々が自然発生的に関わり補ってくれて、人づてに広がって行ったんです。作品もそうなんですけど、人が関わる仕組みが生まれたことが大きな財産になったと思います。これは、「地上絵新聞」で、関わった市民の人たちがこの出来事を人に伝えようと、自分たちで地上絵新聞を10号くらい作り仲間を増やしていき、最後には記録冊子を作りました。そんな風にならずこの事業に関わるわけじゃないけど、濃淡さまざまに関わる市民の方が生まれたことが大きかったと思います。

私たちの活動の原資は小金井市のお金だけじゃなく、東京都のお金もいただいでいて、小学校の活動の研究として、東村山市の小学校と連携しています。授業をどう進めていくかの考え方を説明するためにいいので、紹介します。東村山市で小学校6年生がハンセン病の方がいらした多磨全生園を訪問するのが総合の授業としてあり、今までは感想文を書いて終わりだったんですが、もう少し深めることはできないかと、前に小金井の学校に勤務していた図工の先生と相談しプログラムを作りました。司書さんに関わってもらったり研究に行ったり、図工の時間、学校公開、45分×6コマでプログラムをつくり、ここが肝心なんですけど、グループワークを行い、大人に伴走してもらいました。大人の役割は、技術的なことを教えたり、ハンセン病のことを教えたり、差別はだめだよ、ってことを教えるのではなく、子どもたちがこの経験ってなんだったんだろうということを考え続けることをサポートしました。手を動かして造形をすとか絵を描いてみることにしてこの経験を深めて行こうということなんです。大きな出来事だったと思うのは伴走してくださった市民のみなさん、大人に大きな気づきがあった感じがします。差別はいけないというのは簡単ですが、自分自身の中にある差別意識に気づいたり、あるいは人は人に何を教えるのだろうか、みたいなことを大人が発見するプロセスだったと思います。この写真は、昭和30年代の多磨全生園の模型をつくる、ことを大人がいい出し作りました。いろんなことを同時に考えているんですけど、これは人が物事を理解する、人に物事を伝えるためにはどういうものがあったらいいか、という議論をして作りました。子どもの問題というより、大人がどういうことを学んだのか、です。おまけですけど、昭和30年代以前に全生園に住んでいた方々は牛や豚を飼っていて野菜をつくっていたんです。ひとりの大人の人がいったのは、もしかしたらこの人たちは単に不幸なだけではなく、今の私たちよりはるかに自治能力があり、自分で自分の生活をコントロールすることに関して高い能力を発揮していたのかもしれない、単なる不幸な人たちとちょっといじゃないんじゃないの。自分で自分たちのことを決めるとか、運営する、自治の議論になりました。どの事業でもそうなんですけれど、テーマとか方法に関して適切な方法、素材、やり方とか技術、大切なものってなんだろうかを子どもたち交えて議論することを続けてきています。

プログラミングの事業を図工でやってみようというのをはじめています。コンピュータでプログラミングを書くのではなく、人がプログラミングをするというのはどうい

うことなのか、を、電気製品とかコンピュータを使わずにやっています。小学校6年生と物事の構造を発見する、構造を伝える、コミュニケーションを伝えるのはどういうことだろうと今まさに考えながらやっています。もうひとつ小金井市の前原小学校で、6年生の算数の時間に連携をしようと思っています。補足ですが、図工だけで連携しているんじゃない、今までも国語、社会科、理科学的な要素など、いろんな教科をまたいで連携しています。これはレジュメで、小学生のためのプログラミング入門というタイトルで、葉っぱの構造を見つけようということをやっています。構造デザインっていうんです。構造を見つける、構造を伝える、構造をデザインする、ということからはじめて、葉っぱの構造を要素を抽出して見たらどうなるかなということをやっています。プログラミングというと、入力をしてロボットを動かしましたではなく、概念をどう抽象化するのか、ってことだと思います。社会全体の変化の速度が速くなっていて、じっくりと物事と向き合うことが難しくなった感じがしているのと、自分が関知すること、感覚することの外に世界があるよ、わからなさみたいなものに向き合ったり、わからなさを持ちこたえるのは減っているんじゃないかなと思って、こんな授業を考えています。構造化の授業の中で、大事だと思うのは、比喩に見立ててみる、できごとを抽象化してみることが苦手っぽい感じがしています。すごくダイレクトであることが好まれるのかなと思って、この授業をやっています。想像力、わからないものに対する想像力が大きいのかなと思います。

今日の委員にも参加者がいますが、どんどんスピノフしていく、「小金井と私 秘かな表現」をアサダワタルさんという方とやっていました。アーティストがトップダウンで何かするよりは、公募で参加してくださったみなさんが日々の生活の中にちょっとした表現を加えて、自分の住む町の見方が少し変わっていけばいいな、ということで3年間やったプロジェクトです。これは「想起の遠足」というプログラムになりまして、幼いころの記憶をもとに市民の人がプログラムを作って、そこに市民の人がお客さんとして訪れた、というプロジェクトです。長澤委員もここに映っています。この方は小金井市民ではないんですが、いろんなところで屋台とか作ったり、スープを作っていて、銀行員なんですけど、興味関心でお越しになって、人間関係とか自分の可能性が拡張していったなという感があります。今お話ししたことと同じですが、事務局としての私たちも結局市民なんです。制作＝市民って書いてありますけど、ワークショップに来た方は制作をやるけど市民、さっきの想起の遠足みたいにイベントに参加するのも市民、なんとなくさまざま濃淡のある人の関わりしろが生まれてゆきました。

「芸術文化で人とまちを豊かに」という主題で、私たちがどう考えたのかですが、市民がやることで、行政の方がやる文化的な活動と違って、普通の人たち同士が会うことで生まれる公共的なエリアが生まれたのではないかと思います。違うバックグラウンドの方が、プロジェクトで会う中でちょっとした忍耐とか相手に対する想像力とか、思いやりとか、行きつ戻りつを持ちこたえることを感じたり、普通の人が出会うことで生まれる公共的な像は当然ながら一発で解決が無いし、問題が何かもよくわからない、答もひとつではない、目標もひとつによって違う、パッチワークなんですけど、私たちは9年間事業という機会を通して市民の人たちとそういう空間を作ってきた



たのかなと思います。

【大澤委員長】ありがとうございます。今いらした水津さん、このタイミングで自己紹介をお願いします。

【水津委員】私は子どもと地域を文化でつなぐ活動を「小金井こらぼ」としてNPO活動をしています。そういう部分も意見を出させていただきながら、お話をさせていただきたいと思っています。

【大澤委員】野澤さん、アートフル・アクションに関わっていらっしゃっていると思うんですがコメントをいただいてもよいでしょうか？

【野澤委員】本町小のプログラミングの授業に2回ほど参加させていただいています。はじめ子どもは何で図工でという感じだったんですけど、図工で考えることがあんまりなかったようで、すごく楽しくやっているのをみると、一つ絵を描くのではなくいろんなことで関わっていくのはよいことなのかなと思っています。

【大澤委員長】小林委員からも策定の時のエピソードをお願いします。

【小林真理委員】昔だったので大変だったことしか覚えていません。しかし、今の宮下さんの話を聞いてこの仕組みをつくってよかったと思いました。他の自治体の文化行政の計画に携わったこともあります。このようにはいきませんでした。そういう意味ではよかったかと改めて思いました。また次の計画をどうしたらいいのかということも考えさせられました。

## (6) 小金井市芸術文化振興計画評価・検討有識者会議の評価・検討結果について

【大澤委員長】それでは、議題の6「小金井市芸術文化振興計画評価・検討有識者会議の評価・検討結果について」コミュニティ文化課から説明をお願いします。

【事務局・吉川】手短かに説明させていただきます。計画の冊子の中に、推進委員会の立ち上げ、評価委員会の立ち上げと書かれていましたが、立ち上げることができませんでした。毎年の事業の報告、自己評価はしていましたが、第三者からの評価については、芸術文化の評価は、学識経験者の方でも意見が分かれるところで、何を軸に評価したらいいのか難しく、そのふたつが積み残しの課題となりました。そのため、この計画が10年経って終わる前に評価していただくことと、第2次の計画を作るときに、今までの事業を基に次の計画をどのように立ち上げるかを話し合っていたために、昨年度評価検討有識者会議を立ち上げ専門の先生からお話をいただきました。内容は報告書にすべて書いてありますが、数量的な評価はやはり難しく、定性的な評価となっています。そのなかで、4つのテーマ、社会包摂、文化施設との連携、市民参画、教育について、先生方ひとりひとりから、一番最初に論議のための話題提供を

していただいて、これは有意義なものでしたので、この4点については計画にも生かしていきたいと思っています。

【大澤委員長】昨年度の評価検討有識者会議の委員長をやらせていただきましたので補足をします。非常に中身の濃い議論をさせていただきました。じゃあ評価はどうだったのかというと、Aです、とかBです、とかいうことには至らない、至らせることはできない、ということだったんです。具体的にいいますと、計画書の中に、第1期の計画の14-16ページにかけ重点的に取り組む施策とあり、16ページに事業の構成として事業1、2、3と事業のフレームが定まっています。評価をされていて非常にすばらしいと思ったのは、上位の「日常生活の中で地域と芸術文化へのあらたな見方を発見する」という目的に真摯に取り組んだ結果、この事業のフレームで整理できない活動が生まれた、ということが有識者会議の中で僕が評価したいところでありました。であるがゆえに、AとかBとか%ととか、定量的な結果を出すのは難しい。次期計画のなかでそうした評価のありようを考えることはできると思いますのでぜひご意見いただければありがたいです。

【伊藤副委員長】去年評価委員会に入って、小金井市の取り組みはユニークだと研究者として思っていたんですが、2つポイントがあります。一つは他の市の文化振興は文化施設が中心になっているんです。そうなってきますと、市民は受け身になっていくんです。小金井市の場合、市民が受け身ではなく具体的に関わる仕組みを作りだしてきました。そのために市民が作ったNPO法人がコアとなり、市民が関わって気づいたり発見する仕組みが生まれて行った、それは他の自治体では見られない大きな特徴だと思います。二つ目は、財源も含め小金井市だけに完結していないのが面白いと思います。東京のお金や国のお金もとったり、そうすることによって自由な空間が生まれて、東村山市と組んだり越境していくことが生まれます。越境することでいろんな方との接点が生まれるのが面白いなと思いました。評価というより、評価するなかで知ったことを他の自治体に話し、文化振興計画は施設に関わるんじゃなく、市民が立ち上がる仕組みを作ることが必要だということを説き回っています。去年参加し大変勉強になりました。

【山村委員】重点的に取り組む中で芸術文化の担い手である市民、つなぎ手を重視する、行政がバックアップするとかかかっていますが、市民というのは、小金井市の住人もいますし、文化の担い手として他の地域の方もいますけれど、具体的に挙げていただくとしたらどんな方がいらっしゃるんですか？例えばNPOに入っている方、NPOに入っていないけれども、参加される方、各分野の専門家で講師等で関わる方とか、いろいろありますよね。

【事業実施者・宮下】事業ごとに募集を市報に乗せさせていただいて、応えてくださった方々がコアになる場合がひとつあります。それぞれ市を超えてきてくださっている方々の所属年齢バックグラウンドは一切問わず一緒にやらせていただいています。

【山村委員】住民とか住民じゃないとかも関係ない。市報でやっているから、市民が

多いんでしょうか。

【事業実施者・宮下】市報、フェイスブックとかで広報しています。小金井市の税金だから小金井市民が、ということもいわれやすいと思うんですが、多様な人々がプロジェクトを介して市外から人が来てくれるほうが市にとってメリットがあると思い、市民が受益者という考え方をやめました。市民か市民じゃないかということではあんまり問題にせずに。NPOとして、会員制度の広報は積極的に行っていません。

【山村委員】NPOはメンバーの管理とかされないんですか？

【事業実施者・宮下】基本的にはしません。日時の連絡や趣旨の目的等の連絡くらいです。自主的に関わってくださったり、プロジェクトを立ち上げたりする方もいらっしゃいますので、その時々で手伝ってくださいますが、基本的に入出入り自由という感じでやっています。

【山村委員】核になる人はいるけど数人、100人とかメンバーはいない、ということですよ。

【事業実施者・宮下】NPOとしては、専任が2人とパートタイムが2人います。プロジェクトになると、7、8人の地域の方が集まり、プロジェクトチームを作る。それが終われば解散する。すべてのプロジェクトがそういう感じなんです。関わった方がずっとそこにいるより、経験をいかして他で何かをやっていたらいいと思います。

【大澤委員長】参考までに昨年の評価の報告書に、小金井市芸術文化振興計画事業参加人数一覧として2012年度以降の事業の参加人数が一覧になっています。山村委員がおっしゃったのは、イベントに参加する、お客さんとしてというより、その担い手になっている人たちの住民像が知りたかったことですよ。それは説明していただいたように、NPOに限らないってことですよ。

【小林真理委員】伊藤委員が、施設が無いがゆえの活動を評価してくれましたが、ひとつだけ付け加えます。芸術文化振興計画を作るときに、交流センターの扱いをどうするのが微妙なタイミングでした。施設を市が購入するかどうかも公にできず、はけの森美術館は方向性は決まっていた状況でしたので、施設の問題に触れずに計画を作ってほしいという依頼があったということは一応いい添えておきます。交流センターや美術館が市の施設になったことから、そのことを含めて今後の計画をつくっていく必要があると思います。

【大澤委員】今のところ、事務局から説明をお願いします。宮地楽器ホール、はけの森美術館は基本計画は対象外になっている、という理解でいいでしょうか？

【事務局・吉川】対象外ではないですが、時期的に具体的にこれといえなかったという状況です。センターは立ち上げている途中、美術館は寄贈を受けただけで運営がど

うなるかわからないという状況で、計画の傘下には入っていますが、どの施設がと具体的にはいわれていません。次期計画の中ではそのことも含め、市の施設として交流センター・美術館も含めて考えてもらいたい。そのために交流センターの運営委員さんとはけの森の運営委員さんに入ってもらっています。

【戸館委員】前提としてはけの森美術館寄贈の背景をお話しいただいてもいいですか？

【事務局吉川】はけの森美術館は、坂の下に美術館がありますが、中村研一という画家がおりまして、そこにお住まいになっていたんです。研一さんが亡くなったあとに、遺族の方が財団法人中村研一記念美術館としてやっていたんですが、2003（平成15）年に市に寄付の申し出があり、平成16年に受領、検討委員会ができて2005（平成18）年から小金井市立はけの森美術館として運営がはじまりました。予算があまりないため、非常勤学芸員2人と受付が臨時職員1人という体制で運営しています。展覧会を年に4回やっていますが、中村研一の所蔵作品展と、学芸員企画で地方の美術館から作品を借りてきて展示する、企画展（今は伊藤深水さんのスケッチを集めた展覧会）をやっています。途中で休館期間を長くとらないと運営できないし、展覧会が回っていかないのです。休館が多いと苦情はいただきますが、このような体制でどうにかやっています。

【福沢委員】市民のアンケートが過去の10年間の事業の中でどういう風に反映されたか、その辺をご説明いただければと思います。

【小林真理委員】このアンケートは、計画を作るためにやりました。計画策定後にはアンケートはやっていません。交流センターの運営委員会では施設に対する考え方を聞くアンケートをすべきだという話は毎回出ます。

【大澤委員長】基本計画をつくるためのアンケートと、その後運営や進捗をヒアリングしたり評価するためのアンケートがあるとしたら、後者をやっていないということですね。

## （7）策定委員会において今後検討すべき課題の整理

【大澤委員長】

それでは、議題の「7 策定委員会において今後検討すべき課題の整理」についてコミュニティ文化課から説明をお願いします。

【事務局・吉川】次期計画で検討しなくてはいけないことは、文化施設も含めて次の計画を考えていくこと、今の計画の成果を活かしてよりよい計画にステップアップしていくこと、芸術文化振興計画の推進事業の他にも市民文化祭とか市民の方が関わる文化事業と計画はどう関わるか、その辺も議論していければと思います。あとは、社

会情勢を鑑みた新たな課題はなにか、芸術文化が社会の問題についてどうコンタクトしていけるのか。それは評価検討有識者会議の中で出た社会包摂や教育とアウトリーチ、市民協働のなかに入っていくのではないか。今の社会は10年前とだいぶ変わってきているので、その視点で見たら、次の計画はどういう形になるのかを整理していきたいと思います。あとは、文化芸術基本法の改正がありましたのでそれに見合った計画になっているのか、障害者の芸術活動を推進する法律も制定されていますので、そちらとの整合も考えていかななくてはならない。あとは、中学生にも理解できる内容、この計画がこういうことを目指しているんだよ、ということがわかりやすい計画ができればいいと思います。

【大澤委員長】この点について、少し議論を深めた方がいいと思ひまして、このペーパー、ホチキス綴じの2枚目に策定予定が書かれています。具体的な内容検討は4回くらい、その後計画の文言作成に入ることを考えると、4回のテーマの中でどんな議論をするか、今日もんどかなきゃいけないんです。昨年度の評価検討有識者会議で社会情勢を鑑みた課題やテーマとして、「社会包摂」、「文化施設」「教育とアウトリーチ」、「市民協働」がありました。この4つのテーマに絞って議論すると広がらない、とお思いの方もいらっしゃると思うので、付箋紙とマーカーに基本計画についてこのテーマに取り上げたいという10文字ぐらいのキーワードを書いてください。テーマの中に含まれるかもしれないけれど話してください、4つのキーワードに入っていないけれどこれどうなっているのか。それを出し合って、整理を今日できればと思います。5分で思いつくのをお願いします。

(各委員が付箋を書いたキーワードが集約され、ホワイトボードに掲出されていく。)

(挙げられたキーワード)

<計画の前提・考え方>

「人とまちが豊かになった先にどのようなことをイメージするか」「地域文化」「住み続けられるまちづくり」「地域文化資源の掘りおこし」「市民への周知」「情報の伝え方」「伝え方」「文化の担い手の育成」「庁内連携」「推進体制のあり方(市民をまきこんで 市民が主体となる…)」「評価委員会」「オリパラ後」

<社会包摂>

「高齢者への取り組み」「高齢者の社会参加」「ジェンダー平等」「多文化共生 特に外国人市民へのアプローチ」「どこまでが社会包摂か」

<文化施設>

「アートフル・アクション以外のコア」「芸術文化の情報発信」

<教育とアウトリーチ>

「社会に開かれた教育課程」「学校連携 つながり 仕組み」「学校以外の活動」

<市民協働>

「家族」「表現活動のアウトプットとインプット」「通りすがり」「近所」  
「参加者のかかわり」

<そのほか>

「SNS社会と個人の尊厳」「文化芸術と観光・まちづくり」

【大澤委員】今日いつていただいて出し切るわけじゃないので、また思いついたら入れていただければと思います。なるべくみなさん好きにやっていただきたいのですが、時間の関係でなるべく効率的に多様な意見をいつていただく形にしたいので、これはここに入れていいですか？ということ聞きながら進めていきます。

「高齢者の社会参加」、「ジェンダー平等」、「どこまでが社会包摂か」、「多文化共生 特に外国人市民へのアプローチ」は、社会包摂の考え方を広げて考えていきたいと思うのですが大丈夫ですか？記録をとって、こういう文言を丁寧に扱いたいと、雑に扱わないようにしなきゃなと思っています。では、社会包摂に任せさせていただきました。次は、教育とアウトリーチに「学校連携 つながり 仕組み」、「学校以外の活動」「社会に開かれた教育課程」も教育とアウトリーチに入れましょう。「アートフル・アクション以外のコア」、文化施設は、宮地楽器ホールやはけの森美術館もそうですね。「芸術文化の情報発信」も文化施設に近いかな、どなたですかね。センター機能としての芸術文化の情報発信もしてほしいと。それでちょっと一回置いておいて。市民協働というところに、「市民への周知」を入れてもよいですかね。

【水津委員】ちょっと意味合いが違い、文化振興計画とか条例を持っていること自体への周知がわたしの中では一市民として不十分だと思っているので、その部分をどうしていいのか、を議論していきたいと思っています。

【大澤委員】なるほど、もっと包括する大きな話をしようよ、ということですね。「参加者のかかわり」とか「庁内連携」は市民協働とは別ですか？「推進体制」「評価委員会」、「庁内連携」これはもっと上位なんでしょうね。これは計画自体の進め方であったり、考え方というか、大きな話かもしれません。「参加者のかかわり」はどうでしょう？

【野澤委員】市民協働のカテゴリーで大丈夫です。

【大澤委員長】「地域文化」と書かれた方は？

【水津委員】地域文化の掘り起こし、検証も役割としてあるんじゃないかと思っているので、その部分はどこになるのかなと思っていたんですけど

【大澤委員】この基本計画全体が地域文化について考えているところもあるので、上位の話かなと思います。あとは、「まちづくり」、「文化の担い手の育成」と書かれた方は、どこに位置付ける話でしょうか。

【山村委員】これはなんというか、私が代表しているはけの森美術館の職員の問題からはじまって、まさにNPOの担い手、またNPOを育てる担い手、すべて含んで、人間を育成するのが一番大事という気持ちがあります。単に市民協働というより、市の職員も大事だし、学校の学生も大事だし、そういう意味です。

【大澤委員長】市民が主体となる推進体制のあり方に担い手の育成は近い話とと思いました。上の方に置いておきます。「伝え方」と書いた方はどういうニュアンスですか？

【小林勉委員】いろいろな話をいただきましたが、こんなことをやっていたのか、という話ばかりでした。それを市民が知るにはどうしたらいいか、という話です。

【大澤委員長】まだまだそれが足りないよ、というところですね。「近所」、「通りすがり」、「家族」という大事な言葉はどう位置付ければいいのでしょうか？

【長澤委員】意気込みはすごい低いんですけど、やるぞって行って行かなくても参加できることがあればいいと思います。家族と一緒にいけたりとか、近所で何か開かれているとか、通りすがりに参加して活動ができる、とか。やっているのをあんまり知らなくとも通りすがりにできたら面白い、という感じに考えました。

【大澤委員長】市民協働に近い話でいいですか？家族で参加したり、通りすがりで参加したり、近所さんで、参加出来たりという市民協働にいれられると嬉しいですね。さて、「住み続けられるまちづくり」と書かれた方は？

【山村委員】そうですね、非常に広いことをいってますよね。要するに文化施設のことでもあるし、社会参加、つまり市民協働でもあるし、あらゆる人間がそこに住み続けていたいと思われる環境づくりですよ。

【大澤委員長】「地域文化」と書かれたことにつなげておきます。「人とまちが豊かになった先にどのようなことをイメージするか」ということを書いてくださったのはどんなことですか？

【桑谷委員】「人とまちを豊かに」、ということの目的はなんなのか、それが理解出来ないと、標語だけになってしまうのでは。人が豊かになるとは具体的にどんな風に豊かに変わって行ってほしいのか。例えば、子どもたちに欠けていると思われる冒険、友情、勇気、夢、優しさを子どもの一人ひとりが持てることが出来るように、大人が実現してあげたいのか、一番気になるところです。

【大澤委員長】大きな話とその大きな話をどう具体的にイメージするかですね。「表現活動のアウトプットとインプット」はどなたでしょうか？

【水津委員】「家族」とか「通りすがり」とか、「近所」と似ているんですけど、改め

ていろんなどころに行かなくてもまちなかでそういう経験ができる仕組みづくりが大事だと思いました。表現したり、観たり聞いたりすることのハードルを下げるができる。

【大澤委員長】あとは、「文化芸術と観光・まちづくり」と書かれた方は？

【福沢委員】法律が改正になり、まちづくりと観光とか連携していく役割が出たのかなと、今後結びつける可能性を検討した方がいいかなと思います。

【大澤委員長】これはカテゴライズしづらいので、別にテーマを立てるかどうか、それも含めて検討したいと思います。あとは、「SNS社会と個人の尊厳」を書かれたのはどなたでしょうか。

【山村委員】今話題になっている、表現の自由と核になっているんですが、社会の中でヘイトの問題とかいろんな付度をせまられたり、炎上して表現をしにくい状況があるなかで表現の自由、いたいことをいうことは文化振興の基盤になるので、計画がある以上は、SNS社会、ネット社会の中で個人がいたいことをいえる環境を声をあげていかないと、非常に地盤が危うくなっていると思います。社会包摂の中に入れてもいいんですが、個人が尊厳を持って発言し、自由にモノがいえる社会については考えてほしいなと思います。できれば別カテゴリーで。

【大澤委員長】「オリパラ後」と書いていただいたのは？どなたでしょうか？

【戸舘委員】当たり前話なんですけど、次の計画は次の10年なので、10年先の社会をある程度イメージしていないと共有できない。あえてオリパラ後ってしたのは、高齢化社会だったり、経済至上主義が後景化していくことが考えられるので、それは前提として議論しませんか？ということですよ。

【大澤委員長】上位の話であるとともに、それぞれのカテゴリーの10年後の視点を見据えるという形ですね。ありがとうございます。4つのテーマに整理したとしても、こうしたキーワードを丁寧に拾っていくようにしたいと思いますし、上位の概念であるとか、4つのカテゴリーにはまらない概念について議論できる場所を持ちたいと思います。ここまでは検討すべき課題の整理として見えているんですが、事務局いかがでしょうか？

【事務局・小川】どうでしょうか、次回2週間後で結構すぐなんですよね。例えば、教育って話をする場合だと、小金井市教育関係部署がどんな動きをしているのか、説明があると思うんですが、今から2週間はぎりぎりでもコミ文の説明で文化施設の話ぐらいからいけると助かるんですけど、いかがでしょうか？

【伊藤副委員長】すぐだってこともあるし、今日出た話を深めていくために、各論に入らないで、理念に近いところの一部修正も含めて、10年間の変化のなかでどうなっ



たか、特に基本法の改正を今回どのように取り込んでいくのか、次期の計画のスタンスを軸に各論については、もう一度今日議論したなかでさらに思いついたことを追加してもらってはどうかでしょうか？次の3回で柱について各論的に協議するのはどうでしょうか。次回、例えばSNS社会の変化もあると思いますし、文化振興は人づくり、まちづくり、という話もありますので、住み続けられるまちづくり、の問題も見直してみてもいいと思います。推進体制は最後だと思います。前提になる議論を少ししていったらどうかと思いますね。

【大澤委員長】基本計画の前提になる部分を整理し、大きな話を共有して意見を出し合う会に2回目はさせていただきます。

## (8) その他

【事務局・小川】この時間の開催はいかがでしょうか？

【長澤委員】18時半は厳しくて、18時くらいに保育園から帰ってくるので、ご飯食べてここに来るのはすごい厳しくて、19時か19時15分かにしてもらえるとありがたいです。

【山村委員】家が遠いものですから、21時までには終われば大丈夫です。

【戸舘委員】当日愛媛から来ることもあるので、16時半とかに成田につくことがあるので19時ぐらいが僕もいいんです。僕も。

【事務局・小川】次回は12月17日（火曜日）の19時からです。

【小林真理委員】質問してもいいですか。計画のスケジュールを出していただきましたが、現在小金井市では総合計画を策定しているということで、この総合計画との調整はどうなるのでしょうか。総合計画が令和3年ということですから。ここの議論はどう載せてもらえるのでしょうか。総合計画とこの計画との整合性をとっていくということが、このスケジュールで間に合うのかが気になります。順番がずれてしまうと全く意味がないという気がしています。

【コミュニティ文化課長鈴木】同じ、というか若干早く長期計画が動き出しているんですね。計画のスタンスについては合わせるということで、前計画を合わせて動いています。どこまで反映できるかは、スケジュールを確認して、すべて載せられるかわからないですけど、エッセンス、主要な部分は反映させるよう企画と調整します。

【小林真理委員】総合計画に載せる場合は大きな枠ってだけでいいと思いますので矛盾が無いようにしてほしいです。せっかく作ったのに、総合計画に位置づけられないことによって意味をなさない計画だと困るので、庁内うまく調整していただきたいと

思います。

【伊藤委員】骨子の交換を行政内でやっていただいて、特に今回まちづくりに関わるものは早めにわかり次第いつていただくとよい気がします。

【山村委員】確認ですけれど 2021 年度 4 月から 2030 年度まで、ということですよ。

【大澤委員長】場合によってはこのスケジュールも組みなおす可能性がある。では、よろしいでしょうか。なければ以上で終了いたします。おつかれさまでした。

— 了 —